

# 浜田城跡（庭園跡の調査 1）

御便殿取得活用に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2007年 3月

島根県 浜田市教育委員会

表紙写真

浜田城下町絵図〈浅野家旧蔵〉部分



庭園跡全景（中央のグラウンド・西側より）



御便殿裏のきくすい亭 昭和9年（浜田市立図書館所蔵）



T3 土層（島端の杭列・右側が島）



石州浜田城（庭園部分）

## 序

浜田市では明治40年に東宮殿下（大正天皇）の山陰行啓に伴い建設された御便殿<sup>ごべんてん</sup>の取得活用のため、平成8年より所有者である立正佼成会と協議を進めてきました。

最終的に立正佼成会より、御便殿の建物と浜田城側のグラウンドの土地を一部寄贈いただき、その場所に建物を曳き移転し、保存活用をはかることとなりました。

御便殿と浜田城山の間にあるグラウンドは、明治時代に掬翠池<sup>きくすい池</sup>と呼ばれた池と島が埋め立てられたもので、元々は浜田城の庭園でした。浜田市教育委員会では浜田城跡の周辺施設の解明も重要と位置づけ、平成12年度にグラウンド全体の確認調査、平成18年度に御便殿の曳き移転先の発掘調査を実施しました。

調査の結果、江戸時代から昭和40年頃に埋められた池と島の端にあたる杭列を確認し、池と島の形を復元することができました。島は土を盛り上げて造っており、水門の石垣も確認できました。江戸時代の陶磁器や浜田城と同種の黒瓦も出土しました。また、浜田城築城以前の古墳時代から戦国時代頃の遺物も出土し、浜田市街地の歴史を知る上で重要な調査となりました。

本書はこの調査結果を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習など幅広く活用するための基礎資料としてまとめたものです。この調査報告が地域史研究への一助となり、文化財保護思想の普及へと結びつくことを願っております。

おわりに、あらゆる面から調査に御協力いただきました立正佼成会と地元の方々に対し深甚なる謝意を表する次第であります。

平成19年 3月

浜田市教育委員会

教育長 山田 洋夫

## 例 言

1. 本書は浜田市教育委員会が、御便殿の取得活用に伴い実施した浜田城庭園跡の発掘調査報告書である。平成12・18年度に現地調査、遺物整理と報告書作成を平成18年度に実施した。
2. 調査は以下の組織で行った。

調査主体	浜田市教育委員会教育長 竹中弘忠（平成12年度） 山田洋夫（平成18年度）
調査指導	桑原詔一（浜田市文化財審議会長） 中村唯史（島根県立三瓶自然館） 島根県教育委員会 文化財課
調査員	榊原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）
事務局	浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 平成12年度 文化振興課長 桑田 巖 文化財係長 横田良宏・主任主事 原 裕司 平成18年度 文化振興課長 山根 稔 文化財係長 原 裕司・主任主事 瀧山恵子 主事 近重智美

2. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。  
調査協力 岩町功、大庭千里、中根忠之、浜田市立図書館  
調査参加 池田又次郎、岩本秀雄、上野由美恵、勝田孝幸、小林正徳、佐々木一長、佐々木五郎、佐々木定実、清水義三、田淵義明、坪倉ひとみ、中田洋子、中田貴子、半場利定、村上美佐子、百合川 幸、吉賀久雄、吉田安男
3. 基準点は平成12年度に浜田城測量調査に伴い設置したものを使用し、平成18年度に以前のデータを基に世界測地系の変換と標高の修正を行った。挿図の方位は磁北で示している。業務は株式会社ワールドが実施した。
4. 附属CDには本文（PDF形式）、杭・遺物観察表（XLS形式）、調査・遺物写真（JPEG形式）を収録している。
5. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。
6. 本書の執筆編集は榊原が行った。ただし、第4章は文化財調査コンサルタント株式会社渡辺正巳がまとめたものを榊原が一部調整した。

## 本文目次

第1章 経 過	1
第2章 遺跡の位置と概要	1
第3章 調査の方法と成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査区の概要	4
第3節 遺物	10
第4章 浜田城庭園跡発掘調査における微化石分析	18
第5章 総 括	24

## 第1章 経過

明治40年に大正天皇（皇太子時代・東宮殿下）の行啓の際に造られた御便殿（立正佼成会浜田教会）の取得活用計画の具体化に伴い、御便殿と浜田城山の間にあるグラウンドの調査を実施することとなった。このグラウンドは昭和40年頃まで池と中島があった場所で、近世の絵図に描かれた浜田城の庭園跡にあたる。浜田市と立正佼成会との協議の結果、御便殿と土地の一部が浜田市へ寄贈され、山側へ御便殿を曳き移転した後に保存活用を計ることとなった。平成12年度にグラウンド全体の確認調査、平成18年度に御便殿の曳き移転先の発掘調査と調査報告書作成を実施した。

なお、平成18年5月に同じグラウンドの南側で立正佼成会浜田教会新築工事に伴う発掘調査を実施している。

### 調査日程

平成13年2月23日	T 1～T 8	調査開始
3月9日	中村唯史先生	調査指導
3月11日	桑原韶一先生	調査指導
3月19日		現地調査終了
3月21日～30日		遺物整理
平成18年4月10日	T 9	調査開始
4月27日		県教委調査指導
5月12日		現地調査終了
5月13日～平成19年3月30日		遺物整理・調査報告書作成

## 第2章 遺跡の位置と概要

現在の浜田市街地では明確な縄文・弥生時代の遺跡は確認されていないが、浜田城跡で磨製石斧が2点表採されている（第7図・14）。古墳は夕日ヶ丘古墳（殿町）、社家地古墳群（相生町）が確認されている。夕日ヶ丘古墳は浜田城山の南西側にあったとされるが、現在は消滅しており石組があったといわれる。社家地古墳群は現在、横穴式石室らしき石組が残る。付近から須恵器（杯・甕）が見つかっており、社家地八幡宮に保管されている（川原1970）。

古代から中世にかけては那賀郡小石見郷と記されている。中世の山城としては三重城があり、郭と堀切が確認されている。浜田城跡に、一部中世城郭の痕跡を認める説もある（島根県教育委員会1997）。また、中世後期には現在の浜田は既に港湾都市として発展していたと考えられている（井上2001）。

浜田城は元和5年（1619）に古田大膳大夫重治が松坂から浜田に国替になり、益田・三隅・周布などを検分し、現在の場所に築かれた。元和9年（1623）には城と城下の諸工事を完了したと伝えられている。

本丸には高さ約14mの三重櫓（天守）があり、城内にはこの外に櫓はなかった。二ノ丸には櫓台、始首蔵、本丸常番所、時打番所、三ノ丸には諸役所、土蔵、表屋敷、南屋敷などがあった。城門は一ノ門、二ノ門、中ノ門、大手門などがあり、二ノ門、中ノ門は多門造りで他は冠木門であった。さらに夕日ヶ丘の西側には庭園、茶屋等が設けられていた（浜田市教育委員会2002・2005）。

浜田藩は古田家2代30年・松平周防守家5代111年・本多中務家3代11年・松平周防守家4代68年・松平右近将監家4代31年と続く。慶応2年（1866）の第二次長州戦争の際に城と城下が焼かれた。しかしすべて焼失はせず、天守などは残っていたと考えられている。

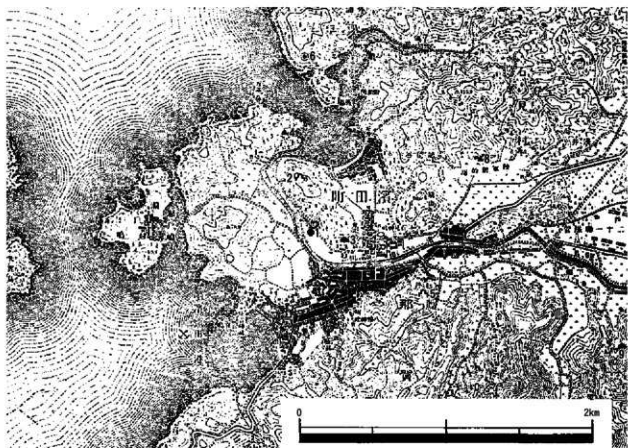
本報告の調査地（浜田城庭園跡）は現在の浜田城山の南裾に位置し、現状はグラウンドになっている。浜田川の河口から約500m遡った東岸に位置する。

この場所は明治40年に大正天皇（皇太子時代・東宮殿下）の行啓の際に造られた「御便殿」と「掬翠池」があった場所である。昭和40年代までは池と中島があったとされている。明治11年11月発行の「濱田市街地之圖」・昭和7年8月発行の「濱田町全図」では島と西側がつながっており、橋がかかっていたと考えられる。昭和34年の地図には池と大小2つの島が確認でき、昭和43年の地図では埋め立てられている。聞き取り調査で昭和40年頃の国道9号線工事の際、現在の商工会議所・城山へ昇る車道あたりの山を削った土で埋め立てたとのことである。

調査地の小字は「古城山」で、近代に浜田城山を含む一帯に付けられた字である。



平成11年発行・番号は表1に対応



第1図 遺跡周辺図 (S=1/25,000)

明治34年発行・番号は表1に対応



番号	遺跡名	所在	種別	概要
1	浜田城跡(庭園跡)	殿町 古城山	城跡	近世～昭和40年頃、発掘調査実施
2	浜田城跡	殿町 古城山	城跡	元和9年(1623)～慶応2年(1866)、平山城、黒瓦、須恵器、磨製石斧、亀山城、県指定史跡
3	夕日ヶ丘古墳	殿町 夕日ヶ丘	古墳?	石組、消滅
4	動木窯跡	港町 動木	窯跡 (陶器・石見焼)	江戸末～、窯跡3基
5	三重城跡	紺屋町	山城跡	郭、堀切
6	日和山方角石	外ノ浦	その他(石碑)	天保5年建立
7	皿山窯跡	外ノ浦	窯跡?	文化年間創業?、丸物、茶器、雑器
8	富島窯跡	浅井	窯跡?(瓦)	伝 浜田城瓦窯
9	社家地古墳群	相生 社家地	古墳	横穴式石室・須恵器

表1 周辺の遺跡概要



作業状況

池と中島は江戸時代の絵図にも描かれており、「浜田城下町絵図」（浅野家旧蔵）、「石州浜田城」（個人蔵）には比較的詳細に描かれており、池と島が近世に遡る事は明らかである。

「浜田城下町絵図」（表紙写真）は後期松平周防守家時代（1769～1836）のもので、中島の大きい島には2棟の建物があり、北側と西側に橋が掛かっている。小さい島には東側より橋が掛かっており、小型の建物が描かれている。池の南側には「茶屋」と記されている。浜田川との合流部には「船入」とかかれ、欄が描かれている。

「石州浜田城」（巻頭図版）は本多中務大輔家時代（1759～1769）の様子を後（1769～1829）に記したものである。「中嶋」と記され、東側より橋が掛かっている。川との合流部に「船蔵」とかかれ、池のくびれ部には「水門」が描かれ、「潮入」とかかれている。

天保年間の「浜田表動向役人衆江文通相」（堀家文書）には茶屋で御目見えし、中島で饗宴が行われた様子が記されている。

また、慶応2年（1866）の第二次長州戦争の際に藩主たちは「御庭水門」より小舟に乗り、城を脱出している（浜田市1973）。

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

平成12年度は昭和34年の地図を元に池と島の輪郭を確認できるように8つの調査区（T1～T8）の調査を実施した。T1では池の南側、T2は中島の南端、T3は中島の北端、T4は島の西端から池底・池の東端、T5・T6・T7は池の輪郭、T8は島の頂部を確認するために設定した。埋め立てた造成土を重機で掘削し、人力で精査を行った。また、重機で一部深く掘り下げ、基盤層の確認を行った。

遺物は大半が重機掘削時に見つかったもので、人力の調査に比べて十分に遺物が採取できなかった。造成土にも古い遺物が含まれていた。

調査の結果、T1で池の南端の杭列、T3で島北端の杭列、T4で島西端の杭列から池底・池の東端、T7で水門の石垣を確認した。

平成18年度は御便殿曳き移転予定地が池の中央にあ

たるため、T7で確認した石垣の続きを確認するようにT9を設定した。

#### 第2節 調査区の概要（第2～5図）

平成12年度調査の結果、中島と池の端にあたる杭列を確認し、昭和40年頃の埋め立てまでの中島と池の輪郭をほぼ確認できた。中島は下に粘質土、上に貝の混じる砂を盛り、池を埋め立てて造った人工の島（築山）である。また、池に直交する石垣が確認され、水門の一部と考えられる。石垣も池の底土の上に盛土をして築いており、池の形は人工的に造られている。

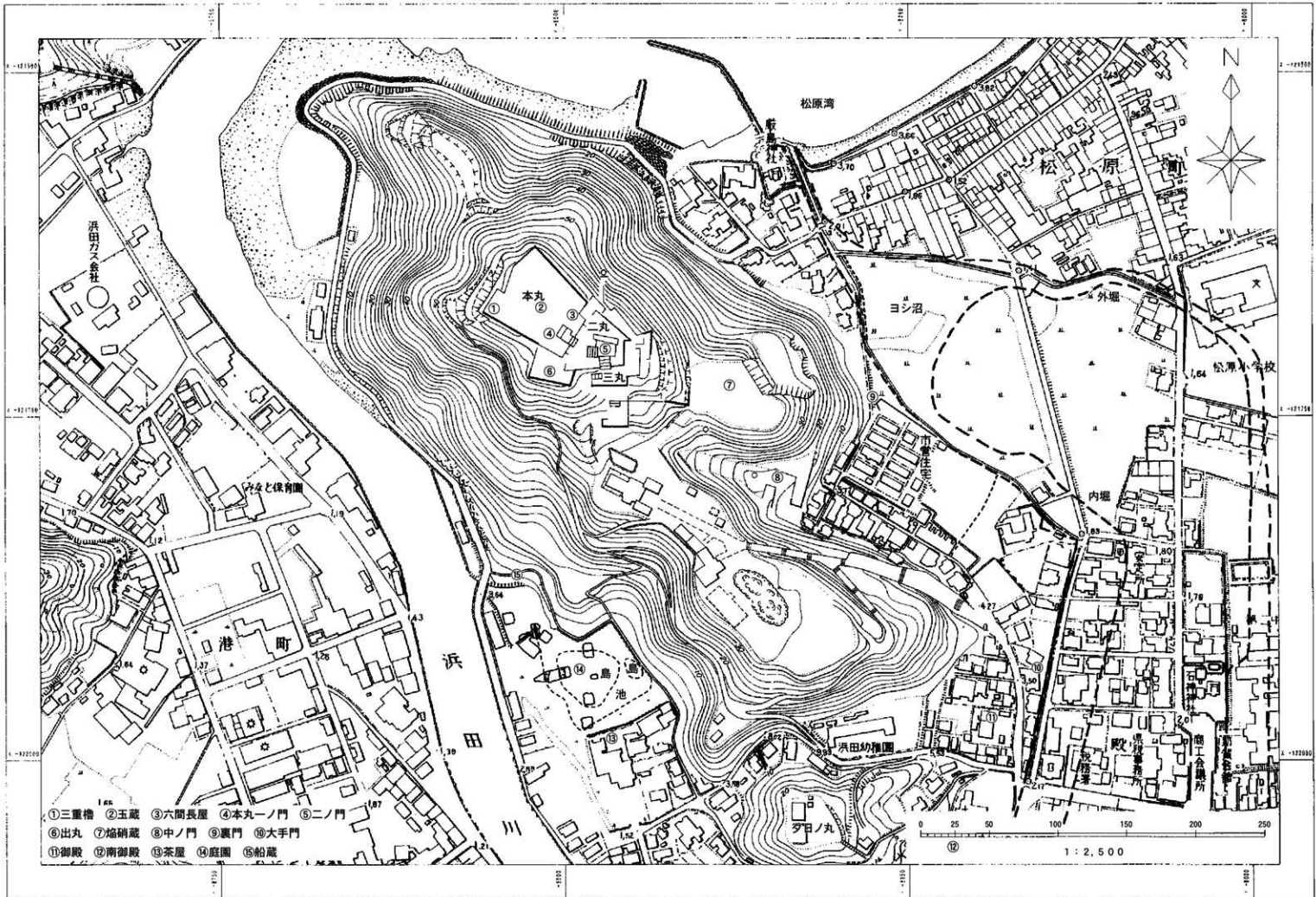
平成18年度調査の結果、T9では石垣の先端は確認できず、石垣の背面にあたる護岸の杭列を確認した。

遺物はほとんどが明治～昭和40年代頃のものと思われる。近世頃と考えられるものは少量出土した。中島の下（池の底）から平安時代頃の須恵器（第7図・15）も出土し、池を埋め立てた造成土からも中世の土師器（第7図・21）など浜田城築城以前の遺物が出土した。

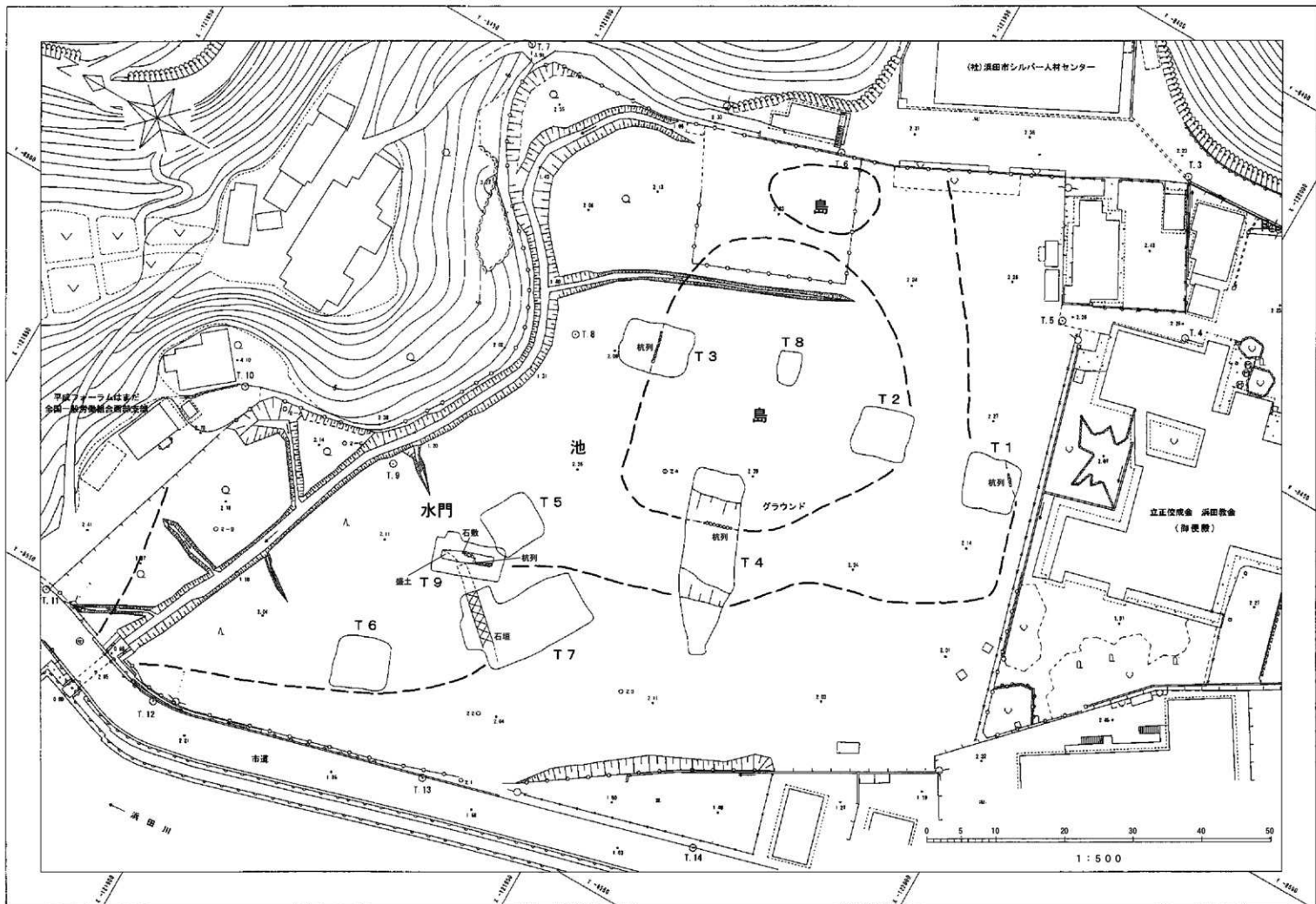
グラウンドの現地地表高は約1.97～2.28mで、川側に向かって低くなる。

T1 池の南端を確認するために設定した8m×8mの調査区である。表土下約0.9m・標高約0.85m以下は青灰色砂質土が堆積していた。標高約-1.7mで黒褐色粘質土になり、標高約-2.5mで灰色細粒砂になる。調査区の南東隅で杭列が確認され、池の南端と考えられる。杭は最大1.2m×直径0.1m程のもので、先端を尖らせている。杭の頭は残りの良い大きいもので標高約0.33mを測るが、ほとんどの杭の頭は標高0m付近である。杭周辺では光沢のある銀化した黒瓦が多く見つかった。おそらく御便殿の葺き替えた瓦を廃棄したと考えられる。

T2 島の南端を確認するために設定した8m×8mの調査区である。表土下約3.6m・標高約-1.678m以下はビニール等を含む黒色泥層が堆積しており、標高約-1.73mで黒褐色粘質土になり、標高約-2.323mで灰色細粒砂になる。調査区は島の南端を確認するために設定したが、おそらく島の中を掘削したと考えられる。



第2図 浜田城庭園跡位置図 (地図は昭和31年のもの)



第3図 調査区設定図

T3 島の北端を確認するために設定した8m×8mの調査区である。表土下約3.6m・標高約-0.5m程で近代以降の池埋土と考えられる黒色泥層が堆積しており、標高約-0.5mで黒褐色粘質土、標高約-1mで貝片の混じる灰色細粒砂、標高約-1.5mで暗灰色細粒砂になる。

黒褐色粘質土は島の下に堆積しており、中島はその上に緑灰色粘質土、黒灰色砂質土を盛って造っている。杭周辺の黒褐色粘質土から平安時代頃の須恵器(第7図15・16・17・19)が出土した。島を形成している盛土には木の根が多く残っており、緑灰色粘質土の下位に10~20cmの丸石が多く認められた。

調査区中央で東西に並ぶ杭列を確認し、島の端に打たれた杭列と考えられる。杭は長さ0.63m×直径0.1m程で、先端だけを加工して尖らせている。杭の頭は標高約-0.5mを測る。杭列周辺では黒瓦・ガラス容器など近代以降のものが多量に見つかり、棧瓦(第6図・5)、雁振瓦(第7図・10)、軒棧瓦(12)、瓦質土器(26)が出土している。

T4 島の西端から池底・池の東端を確認するために設定した8m×26mの調査区である。調査区東側で南北に並ぶ杭列を確認し、島の西端と考えられる。杭は長さ0.63m×直径0.1m程で、先端だけを加工して尖らせている。杭の頭は標高約0mを測る。杭周辺で黒瓦・ガラス容器など近代以降のものが多量に見つかった。島を造る前に堆積した黒褐色粘質土の上に緑灰色粘質土・貝片を多く含む灰白色砂質土・硬質の暗褐色砂質土・褐色砂質土を盛り上げて島を造っている。

池の底は標高約-1.5mを測り、池の幅は約12mを測る。深さは深い地点で約1.5mになる。西の岸辺は下から貝片を少量含む暗灰色細粒砂(標高約-0.9m)・黒灰色泥層(標高約-0.6m)・浅黄色砂質土と緑灰色砂質土(標高約0m)・貝混じり緑灰色砂質土・暗灰色砂質土(旧表土)と堆積している。このうち、浅黄色砂質土と緑灰色砂質土、貝混じり緑灰色砂質土は盛土と考えられる。おそらく西側の岸辺も土を盛って池の形を造ったと考えられる。

出土遺物は大半が近代以降のものだが、黒瓦(第6

図・1)が中島盛土の上層(第4図・7層)から、杭列周辺から丸瓦(第6図・4)、肥前陶器(第7図・27・28)、土師質の七輪(31)が出土している。杭列の間からは棧瓦(第7図・13)が出土している。

T5 池の輪郭を確認するために設定した8m×8mの調査区である。表土下約2.961m・標高約-1.191m以下は黒色泥層が堆積しており、標高約-2.191mで貝を含む灰色細粒砂になる。杭列等の遺構はみつからず、おそらく池の中を掘削したと考えられる。

T6 池の輪郭を確認するために設定した8m×8mの調査区である。表土下約2.457m・標高約-0.96m以下は黒色泥層が堆積しており、標高約-2.13mで貝を含む灰色細粒砂になる。杭列等の遺構はみつからず、おそらく池の中を掘削したと考えられる。

T7 池の輪郭を確認するために設定した8m×16mの調査区である。表土下約2.1m・標高約-0.5m以下に緑灰色粘質土・浅黄色砂質土が約0.3m水平に盛られており、調査区西側でその上に築かれた石垣を確認した。その下、標高約-0.8m以下には黒褐色粘質土、-0.5m以下は黒褐色砂が堆積しており、標高約-1.3mで貝を含む灰色細粒砂になる。石垣は水門の一部と考えられ、全体は確認出来なかったが長さ約10m以上・高さ約1.2mを測る。石垣はほぼ垂直に積み上げられていた。黒褐色粘質土から戦国時代頃の備前焼の摺鉢片(第7図・25)が見つかった。

昭和11~15年頃に作成された浜田市都市計画課所蔵の地図によるとT7の石垣は北東に大きく突き出していたと考えられる。反対側の城山の山も池方向に突き出しており、水門として機能していたと考えられる。この地図によると対岸側の岸辺には石垣があり、浜田川側には船着場と考えられる突出部が確認できる。

T8 島の頂部に設定した3m×5mの調査区である。表土下約1.06m・標高約0.037mまでは造成土が堆積していた。造成土には貝片の混じる緑灰色砂も混

じっており、おそらく中島の高い部分は削られていると考えられる。造成土の下は黒褐色粘質土が混じる緑灰色砂が堆積しており、特に上層に植物の根が多く見られたことから、中島の旧地表面と考えられる。標高約0.663mまで掘り下げた。

T9 T7で確認した石垣の続きを確認するために設定した5m×10mの調査区である。土層は現地表面の下約1.3～2.4mまでは昭和40年代頃の池埋め立ての造成土があり、その下に厚さ10cm程の黒色泥層（標高0.35～0.25m）があり、ビニールやプラスチックを含んでいる。おそらく昭和40年頃までの池の底にあたる。この池の底は北西側へ向けて高くなり、石や横倒しの杭を多く含む緑灰色土がみられる。おそらく池の底に杭や石を含んだ土砂を盛った（棄てた）と考えられる。

石垣の続きは調査区内では確認できなかった。しかし、南西側で南北方向の杭列を確認し、北側に石が多く見つかった。石は東側にやや平坦な大石を配置し区画状になっている。南東側に石は確認できず、杭列と大石で護岸部と池を区分している。西側は石の上面に凹凸があり雑然と置かれている。

杭は直径4.5～14cm大で自然木（マツ・クリ）の先端のみを粗く切断して尖らせている。杭の長さは85cm～1.25mである。最も東側（池底側）には直径9～14cmのやや大きめの杭が多く、杭列の中央は4～5cmの小型の杭が目立つ。

杭列上面の盛土（第4図・7層）から黒瓦の有段式丸瓦（第6図・2）、杭列と石の間から焙烙（第7図・30）が出土している。杭列周辺からは平瓦（第6図・7）が出土した。池内の堆積土である黒灰色粘質土からは黒瓦の丸瓦（第6図・3）、椀瓦（6）、鬘斗瓦（第7図・11）、須恵器片（18）、土師器（22・23）、石見焼の行平鍋の蓋（29）などがみつかった。

### 第3節 遺物（第6図 1～9・第7図 10～31）

（第6図・1～7・第7図・10～13）は瓦である。

（4）の丸瓦のみが表面に褐色釉がかかるが、ほとんどが表面に炭素を吸着させた黒瓦（いぶし瓦）である。

黒瓦は胎土が白色系で表面の炭素吸着にむらがある軟質のもの（1～3・5～7・10・11）と、胎土が灰色系で光沢があり表面が銀化した硬質のもの（12・13）に分けられる。

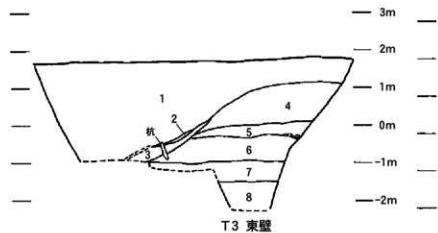
（第6図・1・2）は有段式丸瓦で短く先細りの玉縁部がつく。（1）は側面、玉縁部先端部が2面取りされる。（2）の側面は1面取りである。凸面は約幅7mmの縦方向のヘラナデ、凹面にはゴザ目状の粗い布目痕と吊紐痕が残る。（3）は有段式丸瓦の丸瓦端部で、内面には幅1cmほどの棒状の工具によるタキキ痕が残る。端部は2面取りである。この内面調整は、丸瓦ではほとんど見られない。

（4）は光沢のある褐色釉（来待釉）が凸面と分割面の外側半分にかかる有段式丸瓦で、側面は外面に切り込みをいれて分割し、軽いナデを施している。内面にはガーゼ状の細かい布目痕と幅1.6cm程の模骨痕が残る。他の丸瓦に比べて薄手で、軽量で硬質な印象を受ける。

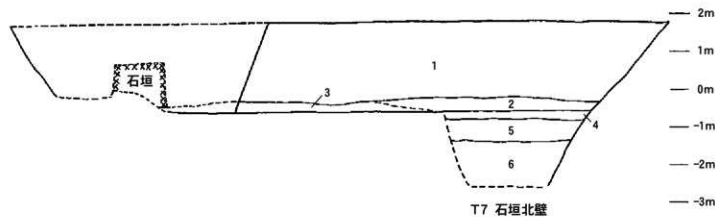
（5・6）は椀瓦、（7）は平瓦でいずれも表面の炭素吸着にむらがある。椀部は屈折して直線的に伸び、屈折した椀部が長いもの（5）と短いもの（6）がある。（5・7）の側面は2面取りである。

（8・9）は杭で池の護岸に用いられていたものである。杭は直径3～12cmのものがあり、検出したもので大型（直径9～12cm・16本）、中型（直径6～8cm・36本）、小型（直径3～5cm・19本）になり、中型が最も多い。長さは引き抜いたもので34～125.5cmのものがあり、枝を落として先端のみを加工したものが多し。樹種は大半がマツで、スギやクリが少量認められた。（8）は細身の自然木（クリか）の先を大きく一面、さらに先端部を2面切断して尖らせている。（9）は自然木（マツ）の小枝を落し、先端を大きく4面に切断して尖らせている。

（第7図・10）は雁振瓦で、引掛部は剥離していたが、他の小片を参考に図上で復元している。段部は両方の接合面に粗い4本の条線をいれて重ね、補強粘土を瓦部へ貼り付けてナデている。引掛部を接合した後には側面を削っている。横断面はへ状になり明らかに平瓦より屈曲が強い。頂部の凹面には長さ4.8cm程の方



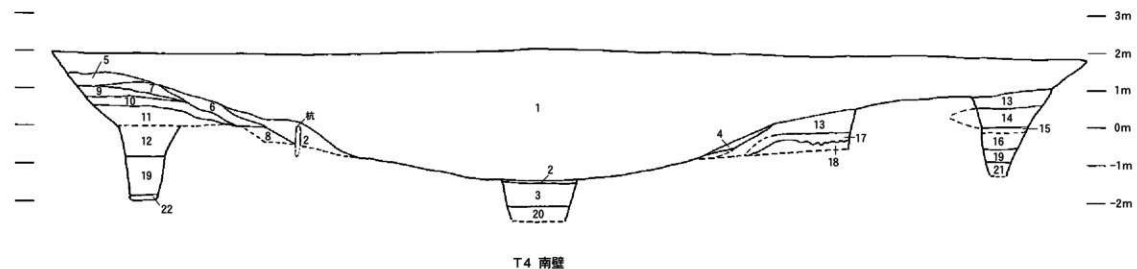
- T3 東壁
- 1 造成土 (下層には貝の混じる青灰色砂が混じる。島を削平して埋めたものか?)
  - 2 黒色泥層
  - 3 黒灰色砂質土
  - 4 黒灰色砂質土 (根多い): 中島盛土
  - 5 緑灰色粘質土 (層中位は黄褐色。交互に積んだものか? 層下位は砂質): 中島盛土
  - 6 黒褐色粘質土 (層上位には緑灰色のクサリレキ粒が多い)
  - 7 貝片混じり灰白細粒砂
  - 8 暗灰色細粒砂



- T7 (石垣) 北
- 1 造成土
  - 2 緑灰色粘質土: 盛土
  - 3 浅黄色砂質土 (緑灰色粘質土混じる): 盛土
  - 4 黒褐色粘質土
  - 5 黒灰色砂質土
  - 6 貝混じり灰色細粒砂



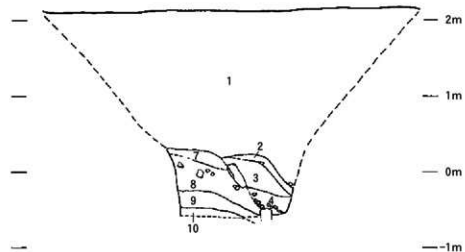
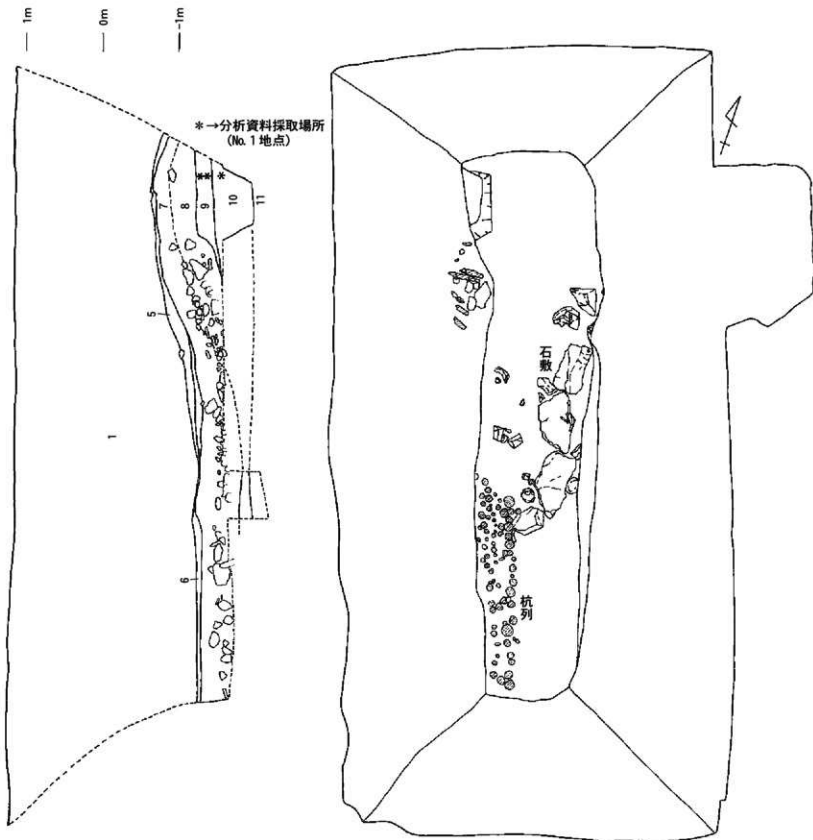
- T4 南壁
- 1 造成土
  - 2 黒色泥層: 最終段階の池底
  - 3 黒褐色泥層
  - 4 暗灰色砂質土
  - 5 褐色砂質土 (貝片少量含む): 中島盛土
  - 6 暗緑灰色粘質土 (根多い): 中島盛土
  - 7 淡褐色砂質土: 中島盛土
  - 8 暗灰色粘質土: 中島盛土
  - 9 暗褐色砂質土 (固い): 中島盛土
  - 10 灰白色砂質土 (貝片多く含む): 中島盛土
  - 11 緑灰色粘質土 (褐色味つよい): 中島盛土
  - 12 緑灰色粘質土: 中島盛土
  - 13 暗灰色砂質土: 岸側盛土
  - 14 貝混り灰色砂質土 (二次堆積): 岸側盛土
  - 15 緑灰色砂質土 (硬質): 岸側盛土
  - 16 浅黄色砂質土: 岸側盛土
  - 17 緑灰色粘質土混じり黒色泥層: 岸側盛土
  - 18 緑灰色土 (黒色土ブロック含む): 岸側盛土
  - 19 黒灰色泥層
  - 20 灰色細粒砂 (貝は少ない)
  - 21 暗灰色細粒砂 (貝少量含む)
  - 22 貝混じり灰白色砂



T4 南壁



第4図 T3・T4・T7土層図 (S=1/50)



T 9

- 1 造成土
- 2 黒色泥層 (木質、ビニール)
- 3 暗灰色泥層 (ビニール、竹、木質)
- 4 暗灰色砂質土
- 5 黒褐色泥層 (池底よりやや高く干上がった状態か)
- 6 黒色泥層：最終段階の池底
- 7 黒灰色粘質土：盛土？
- 8 石混じり黒灰色粘質土：盛土？
- 9 黒色粘質土
- 10 黒灰色細粒砂
- 11 貝破片混じり暗灰色細粒砂



第5図 T9実測図 (S=1/50)



形の型痕が連続して残り、凸台の型痕（台の接合部の金具か）の可能性もある。(11)は平瓦の凹面に5本の平行線が入っており、熨斗瓦と考えられる。側部と端部は2面取りである。浜田城の表採品を見ると、平瓦に切込みを入れて半葺した熨斗瓦に平行線や波線が見られる。

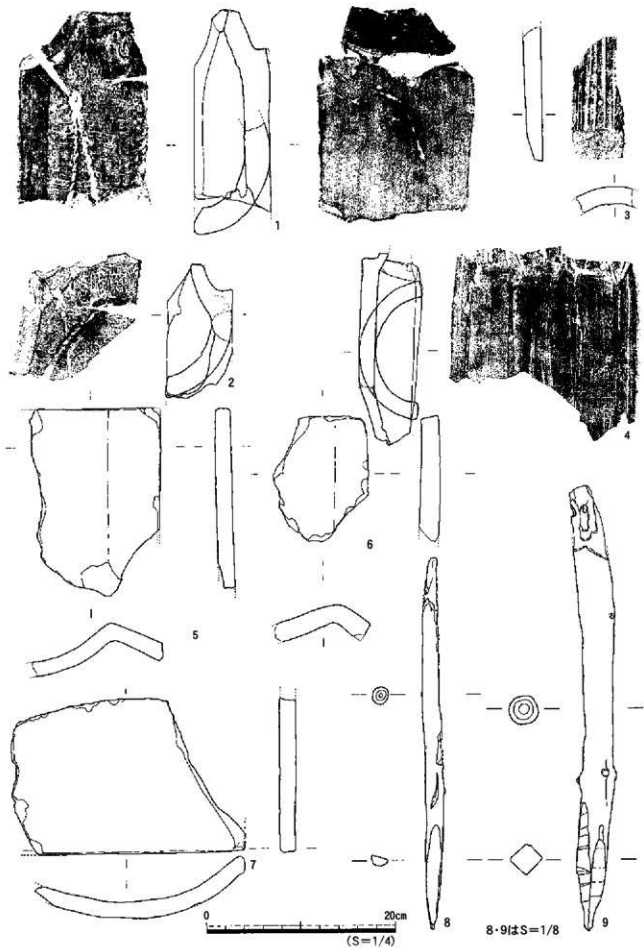
(12)は軒棧瓦で小丸瓦当部は剥離しているが、おそらく巴文がつくと考えられる。平瓦部の文様は中心に輪郭だけの宝珠をおき、唐草が上下に2単位巻く簡素なものである。(13)は棧瓦でおそらく左棧瓦である。側端部調整は1面でやや丸みをもつ。切り込みは1ヶ所残る。表面は銀化して光沢がある。凸面に11本単位のクシ状工具で×印状に線が入る。すべり止めと考えられる。

(14)は以前に調査区北東側の城山の谷部（紅葉谷）の斜面で表採されたとされる磨製石斧である。図化した他にも同様の完形品が1点見つかっている。全体的に研磨されているが、基部周辺には敲打痕が残る。他の1点はよく研磨されている。

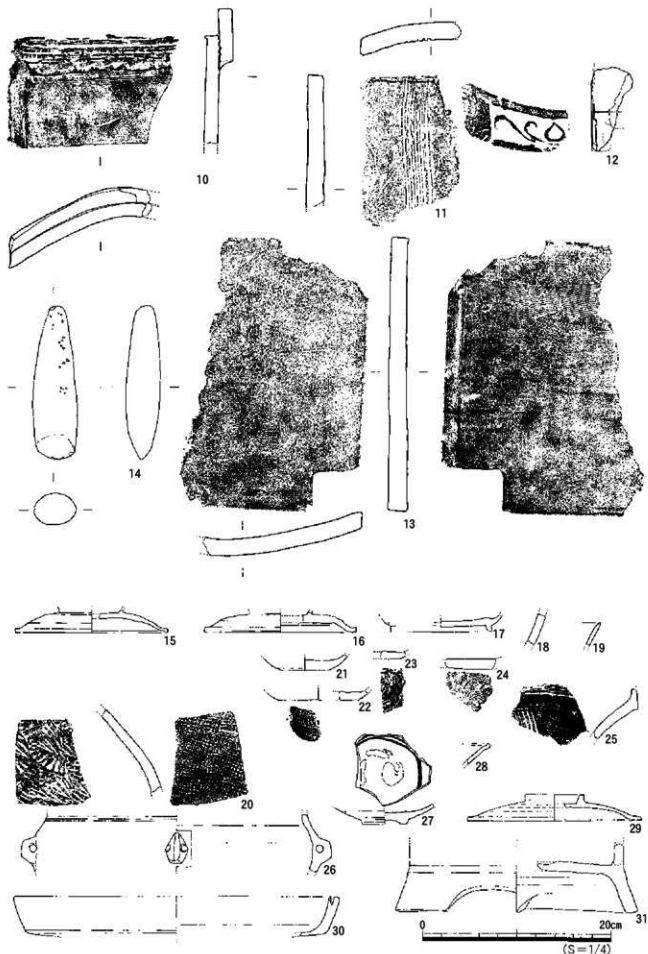
(15～20)は須恵器である。(15・16)は蓋、(17・19)は杯、(20)は甕である。蓋は外開きの輪状つまみをつくり、天井部はヘラキリで切り離す。つまみ部の内面は不定方向のナデで平坦になる。口唇部は屈曲して下垂する。いずれも口径16cm・つまみ径6.6cm・器高2cm以上になる。(17)の杯は底径（高台径）10.6cmになり、底部をヘラ切りで切り離し、高台を貼り付けている。(18)は内面にロクロナデ痕が残り、おそらく壺類の体部と考えられる。甕は外面に浅い2mm×3mmの格子タタキ、内面に放射状タタキ痕が残る。(21～24)は土師器の杯・皿である。いずれも底部で回転糸切り痕が残る。他にも底部や体部の破片があるが、全形を復元できるものはない。(25)は備前焼の摺鉢片で内面に摺目が5本以上残る。(26)は瓦質の鍋か茶釜で把手が1箇所残り、外面には煤が付着する。(27・28)は肥前系陶器である。(27)は皿で、内面には砂目が残る。

(28)はおそらく溝縁皿の口縁部である。(29)は石見焼の行平鍋の蓋で薄く来待軸がかかる。(30)は土師質の焙烙で口縁上端部から把手のための穴が開けられているが貫通していない。(31)は脚部に半円の切込み

をいれた土師質の大型品である。佐野焼の七輪の可能性もある。



第6図 出土遺物(1)



第7圖 出土遺物(2)

## 第4章 浜田城庭園跡発掘調査における 微化石分析

渡辺正巳  
(文化財調査コンサルタント株式会社)

### はじめに

浜田城庭園跡は、島根県浜田市殿町地内に立地する。本報は、庭園内及び近辺の古環境推定の目的で、文化財調査コンサルタント株式会社が浜田市教育委員会の委託を受け実施した、花粉・珪藻分析報告書をまとめ直したものである。

### 分析試料について

図1に調査区の配置及び試料採取地点を示す。図中のNo.1、No.2地点が試料採取地点である。各地点の模式柱状図及び検鏡層準を図2～7の各種ダイアグラム中に示す。

No.1地点では試料No.1～3の3試料を採取・分析処理の後、概査を行なった。概査の結果を踏まえ試料No.1で花粉分析を、2で珪藻分析を、3で花粉分析、珪藻分析を行った。

No.2地点では試料No.1～5の5試料を採取・分析処理の後、概査を行なった。概査の結果を踏まえ試料No.1で花粉分析を、試料No.2、4で花粉分析、珪藻分析を行った。

### 分析方法および分析結果

#### (1) 微化石概査結果

花粉分析用プレバート、及び珪藻分析用プレバートを用いて、植物片、微粒炭、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を調べた。含有状況は、表1中の凡例に示した5段階にまとめている。

#### (2) 花粉分析

処理は渡辺(1995a)に従って行った。プレバートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村(1974)に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科(40 $\mu$ m以上)と、

イネを含む可能性の低い小型のイネ科(40 $\mu$ m未満)に細分している。

分析結果を図2、3の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群毎に累積百分率として示した。

#### (3) 珪藻分析

処理は渡辺(1995b)に従って行った。プレバートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。同定総数が200粒以上になるまで観察・同定を行った。

分析結果を図4～7の珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラムに示す。珪藻ダイアグラムでは検出総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、白抜きスペクトルで示している。検出量の少ない試料については出現した種類を\*で示している。また珪藻総合ダイアグラムで表した5つのグラフの内、左端の「生息域別グラフ」では同定した全ての種類を対象にそれぞれの要因(生息域)毎に百分率で表した。そのほかの4つのグラフでは、淡水種についてそれぞれの要因毎に百分率を算出し、累積百分率で示してある。

### 花粉分帯および既知の結果との比較

花粉分析の結果を基に局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。さらに、浜田市内北部の横路遺跡(川崎地質(株), 1998)や川向遺跡(川崎地質(株), 2000)などで実施・報告されている結果と比較し、それぞれの花粉帯が示す年代について、考察した。

また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

(1) II帯 (No.1地点試料1): スギ属が卓越し、マツ属(複雑管束亜属)、モミ属、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。胞子の割合がやや高く、草本花粉ではイネ科(40 $\mu$ m未満)、イネ科(40 $\mu$ m以上)が卓越傾向にあ

る。

スギ属が卓越し、マツ属(複雑管束亜属)を伴う花粉組成は、横路遺跡(川崎地質(株), 1998)や川向遺跡(川崎地質(株), 2000)において、弥生時代後期から中世頃までの層準で認められる。したがって、今回のⅡ帯堆積時期が弥生時代後期から中世頃までのどこかであることが示唆される。

(2) I 帯(№1 地点試料№3、№2 地点試料№1~4): マツ属(複雑管束亜属)が卓越傾向にあり、スギ属を伴う。

付随する木本花粉、草本花粉の出現傾向から、a~c 垂帯に細分した。

c 垂帯(№1 地点試料№3、№2 地点試料№1): 上位の2垂帯に比べ、マツ属(複雑管束亜属)、スギ属以外の木本花粉が高率を示す。№1 地点では草本花粉の割合が高く、№2 地点でのc 垂帯とb 垂帯の中間的な様相を示す。

b 垂帯(№2 地点試料№2): 卓越するマツ属(複雑管束亜属)の出現率がさらに高率になるが、スギ属の出現率は前垂帯からほとんど変化しない。№2 地点では、c 垂帯との間で草本花粉の割合が高くなる。特にイネ科(40%以上)が特徴的である。

a 垂帯(№2 地点試料№4): スギ属が27%とやや高率になるが、その他の木本花粉は10%未満である。また、草本花粉の割合が高い。

マツ属(複雑管束亜属)が卓越する花粉組成は、横路遺跡(川崎地質(株), 1998)において、近世以降の層準で認められる。したがって、今回のI 帯堆積時期が近世以降であることが示唆される。

#### 珪藻化石群集の設定

珪藻分析結果を基に、珪藻化石群集D-I、IIを設定した。

(1) 珪藻化石群集D-I(№1 地点試料№2、3): 汽水種が卓越する。特に*Navicula yarensis*, *Thalassiosira bramaputrae* が高率を示す。

(2) 珪藻化石群集D-II(№2 地点試料№2、4): 淡水・底生種が卓越する。

#### 古環境変遷

以下では、花粉分析結果及び珪藻分析結果を基に堆積環境及び周辺の古植生を推定する。時間的な変遷を把握しやすいように、古い時期から新しい時期へ向け、花粉帯に従い述べる。

(1) II 帯期(中世以前)

① 堆積時期: 前述のように、II 帯の示す時期は中世以前であると考えられる。したがって、この層準は浜田城築城前に堆積した可能性が高い。

② 堆積環境: 細砂~中砂で腐植質シルトのラミナを挟むなど、岸辺に近い場所で堆積した可能性が示唆される。このことは、立地を概観する限り妥当な推定であると考えられる。また、上位の腐植質粘土層が汽水成層であることから、分析を行っていないものの、本層準も汽水成あるいは海成層である可能性が指摘される。

③ 周辺の植生: 草本花粉、胞子の割合が高く、これらの植物が近辺に生育していた可能性が高い。調査地点近辺に水田があった可能性が指摘できる。また、畦や林縁の草地にはヨモギ類やススキ類、シダ類が生育し、川岸(あるいは池の縁?)にはアシが繁茂していた可能性も指摘できる。

城山あるいは浜田平野近辺の丘陵、山地では、開発が進み、極相林であった照葉樹林が伐採され、アカマツ林あるいはコナラ林などの二次植生に覆われていた可能性がある。また、調査地近辺の川沿いの湿地あるいは谷沿いにスギが生育していた可能性がある。

(2) I 帯期(近世以降)

① 堆積時期: 前述のように、I 帯の示す時期は近世以降であると考えられる。したがって、浜田城築城以降に庭園内の池で堆積した可能性が高い。

② I 帯c 垂帯の堆積環境: 恐らく下部層準に当たる№1 地点5層(試料№3 層準)は、汽水環境下で堆積したと考えられる。庭園内の池は、初期には水門を介して浜田川、日本海に繋がっていたことが明らかである。したがってこの層準は、水門が機能していた頃の堆積物であると考えられる。また同層準の花粉組成ではイネ科(40%以上)を始めとする草本花粉が卓越傾向にあり、庭園外の水田からの流れ込みが予想される。

このことも、恐らく水門を介して外部との水の交換が頻繁にあったことを示唆するものであろう。

一方、I帯c垂帯上部層準に当たるNo.2地点7層(試料No.1層準)の花粉組成では、草本花粉の割合が低く、下部と様相が異なる。珪藻分析を実施していないものの、水門が閉ざされ外部との水の交換が乏しくなった可能性が指摘される。

③ I帯c垂帯の周辺の植生：下部ではイネ科(40ミクロ以上)を主とする草本花粉の出現率が高い。庭園内に水田があったとは考えにくく、浜田城山周辺地域に水田が広がっていたと考えられる。一方、庭園内の池の縁や浜田川の川岸にはアシが繁茂し、周辺地域の畦や林縁の草地や庭園内にはヨモギ類やススキ類、シダ類が生育していたと考えられる。

上部では草本花粉の割合が低く、また木本花粉でもモチノキ属など飛散距離の短い花粉が多く検出されている。モチノキ属やモクセイ科などには現在でも庭木とされるものが多く含まれる。草本花粉のうち、イネ科(40ミクロ以上)は外部からもたらされた可能性が高いものの、多くの草本花粉やモチノキ属などは庭園内に生育していた可能性が高い。

城山あるいは浜田平野近辺の丘陵、山地は、主としてアカマツ林で覆われていたと考えられる。また、前の時期に卓越していたスギが、川沿いの湿地あるいは谷沿いに残存していた可能性がある。

④ I帯b、a垂帯の堆積環境：珪藻分析結果では淡水・底生種がほとんどを占め、淡水の池内で堆積したと考えられる。

⑤ I帯b、a垂帯の周辺の植生：再びイネ科(40ミクロ以上)を主とする草本花粉の出現率が高くなる。池内への導水経路が変化し、周辺地域の水田からもたらされた可能性がある。また前時期同様に、庭園内の池の縁や浜田川の川岸にはアシが繁茂し、周辺地域の畦や林縁の草地や庭園内にはヨモギ類やススキ類、シダ類が生育していたと考えられる。

b垂帯の時期にはc垂帯の時期と同様に、城山あるいは浜田平野近辺の丘陵、山地は、主としてアカマツ林で覆われていたと考えられる。また、スギも引き続き川沿いの湿地あるいは谷沿いに残存していた可能性

がある。

一方a垂帯の時期には、マツ属(複維管束亜属)花粉がやや低率になり、スギ属花粉が増加する。スギ属花粉の増加は、近代の山地植林に由来する可能性があるが、庭園内に植栽された可能性も否定できない。

## まとめ

浜田城庭園跡での花粉分析、珪藻分析を実施し、以下の事柄が明らかになった。

(1) 花粉分析結果から、I、II帯の局地花粉帯を設定した。さらにI帯をa～c垂帯に細分した。また、これらの花粉帯を浜田市北部の横路遺跡、川向遺跡での花粉分析結果と比較し、I帯が近世以降の植生を、II帯が弥生時代後期から中世頃までの植生を表していることが分かった。

(2) 珪藻分析結果から珪藻化石群集D-I、IIを識別した。D-Iは淡水環境、D-IIは汽水環境での堆積を示唆した。

(3) 庭園内及び浜田城周辺地域の古植生を推定した。

特筆すべき点は、以下の事柄である。

① II帯の時期(中世以前)には既に丘陵、山地の開発が進み、照葉樹林が伐採されアカマツ林、コナラ林などの二次植生に代わっていたと考えられる。また、調査地近辺の川沿いの湿地あるいは谷沿いにスギが生育していたと考えられる。

② 庭園ができた当初には、浜田川から池内に汽水が流れ込んでいた可能性があるが、後に遮断され、淡水化したと考えられた。また、モチノキ属や、モクセイ科の樹木が庭園内に植栽されたと考えられる。

③ 浜田城築城以降は、周辺の丘陵や山地までアカマツ林に広く覆われていたと考えられる。一方で、部分的にスギ林が残存していた可能性がある。

④ 庭園の終末期にはスギが植栽された可能性があるが、近代のスギ植林に由来する可能性もある。

## 引用文献

川崎地質株式会社(1998)横路遺跡(原井ヶ市地区)発掘調査における花粉分析、横路遺跡(原井ヶ市地区)-浜田東中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、65-71、島根県浜田市教育委員会。

川崎地質株式会社 (2000) 川向遺跡発掘調査における自然科学分析。  
川向遺跡-多陀寺川荒廃砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
-、40-46、浜田土木建築事務所・浜田市教育委員会。

中村 純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネを中心として。  
第四紀研究、13、187-197。

渡辺正巳 (1995a) 花粉分析法、考古資料分析法、84、85、ニュー  
サイエンス社

渡辺正巳 (1995b) 珪藻分析法、考古資料分析法、86、87、ニュー  
サイエンス社

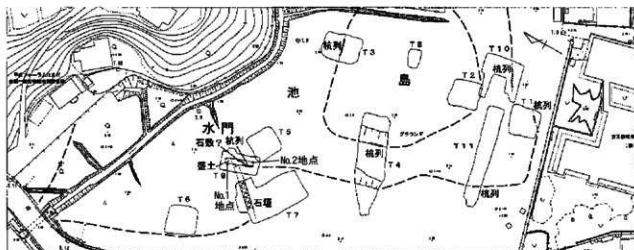


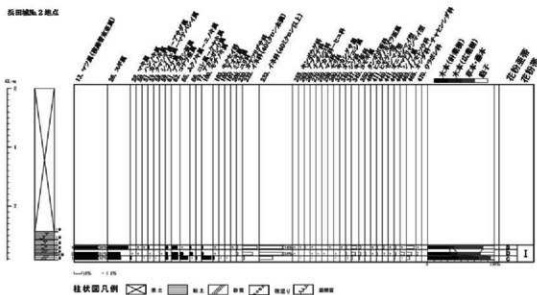
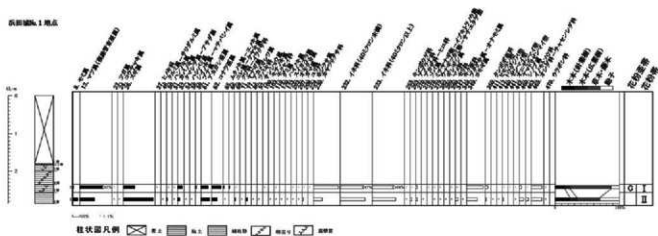
図1 調査区の配置および試料採取地点

地点名	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラトアール
No.1地点	1	○	△	○	△	△×	△
	2	◎	△	○	○	△×	○
	3	◎	△	○	◎	△	○
No.2地点	1	◎	△	◎	△×	△	△
	2	◎	△×	◎	△	△×	○
	3	◎	△	◎	△	△	△
	4	◎	△	○	○	△	○
	5	◎	△	○	○	△×	△

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる

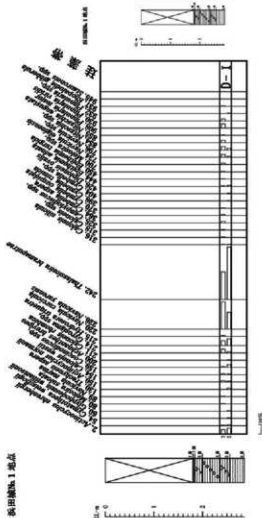
△：非常に少ない △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

表1 微化石概査結果



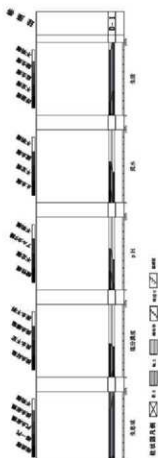


表出欄No.1地点



柱状図凡例  
 図4 No.1地点の珪藻コンクリートパイラム

図5 No.1地点の珪藻コンクリートパイラム

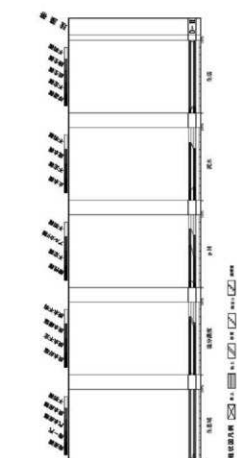


表出欄No.2地点



柱状図凡例  
 図6 No.2地点の珪藻コンクリートパイラム

図7 No.2地点の珪藻コンクリートパイラム



## 第5章 総括

調査の結果、島と池の端にあたる杭列を確認し、昭和40年頃に埋め立てられるまでの中島と池の輪郭をほぼ確認することが出来た。中島はT3とT4で確認され、下に粘質土、上に貝の混じる砂を盛り上げて造っている。T8の状況から島の上面は埋め立て時に削られたと考えられる。この島は池に2つあった島のうち、大きな中島にあたる。近世の絵図では建物が描かれ、明治には掬翠亭という茶屋があったことがわかっていいる。しかし、近世に建物が掬翠亭と呼ばれていた記録はなく、御便殿の位置に茶屋と記されているのみである。近代には掬翠池とも呼ばれている。

絵図や地図では東側の小さい島や大小の島へ渡る橋がみられるが、今回の調査では確認できなかった。古写真では小さい島に祠（厳島神社）と鳥居が見られる。

T7では池に直交して突き出す石垣が確認され、水門の一部と考えられる。石垣も池の底土の上に盛土をして造られ、池全体が人工的に造られたことを示唆している。石垣は埋め立てられる頃まで見えていたと聞いたが、いつ築かれたかは不明である。

T9では石垣の先端は確認できず、石垣の背面にあたる護岸の杭列を確認した。石垣と併せて水門の護岸部を造っていたと考えられ、以下の変遷が考えられる。

湿地面に薄く盛土を行い、川側に石垣を築き、背面に護岸の杭列、先端部には石を敷く。杭列は複数あり長期間維持補修された可能性がある。(江戸～明治時代頃)

石敷部分(水門の先端)に石や杭を含む土(庭園工事に伴う廃棄か)が盛られ、水門部分は池底が浅くなる。(明治10年の東宮殿下行啓に伴う造園工事が、昭和27年頃の個人所有時の工事)

杭列・石敷はその後埋没し、機能しなくなる。最終的に池全体が造成土で埋め立てられる。(～昭和40年頃)

瓦は遺物の項でも述べたが、黒瓦は胎土が白色系で表面の炭素吸着にむらがある軟質のもの(1～3・5～7・10・11)と、胎土が灰色系で光沢があり表面が銀化した硬質のもの(12・13)に分けられる。後者の瓦は御便殿に近いT1で多く出土し、明治40年(1907)

に建てられた御便殿に当初葺かれていた瓦と考えられる。(12)の軒棧瓦も小丸瓦当部がつくもので焼成が後者に似ており、文様も近世末の一般的な文様に比べ簡素化している。棧瓦と同様に明治40年頃と考えられる。なお、御便殿は昭和40年に黒瓦から現在の三州瓦に葺きかえ、平成2年に棟の瓦だけ石州瓦に替えている。前者の黒瓦は近世末頃と考えられ、現在の浜田城山からの表採品に似ている。あきらかに後世のものを除くと来待輪(赤褐色)をかけた石州瓦は丸瓦が1点ある(第6図・4)。

浜田城の瓦生産に関連する伝承・史料としては、築城の際に大坂から招かれた瓦工甚太郎(子孫は富島家)が浅井(現在の田町)に土地を給わり住んだとされる(浜田市1953、山藤1990、浜田市教育委員会1992など)。また、天保10年(1868)より御用瓦師 福島屋幾右衛門が黒瓦焼の御作事を行っていたが、慶応3年(1867)より黒瓦の御用が途絶えたため、赤瓦生産を始めたいと申し出た史料もある(山藤1990、浜田市教育委員会1992など)。

いずれも瓦窯の場所は不明だが、城と周辺施設は主に黒瓦が用いられ、地域的には赤瓦(いわゆる石州瓦)が主体になっていたと考えられる。

出土品はほとんどが明治～昭和40年代頃のものともみられ、近世頃と考えられるものは数点見つかった。

浜田城は元和6年(1620)に築城を開始し、元和9年(1623)に工事が完了したと伝えられているが、出土品には17世紀中頃と見られる肥前陶器(27・28)から18世紀頃の陶胎染付、18世紀末頃の焙烙(30)・七輪(31)など少量ではあるが近世の土器・陶磁器類が認められる。いずれも明確に遺構に伴わないが、近世に庭園跡が機能していたことがわかる。庭園として維持管理されていたために、近世は遺物が少ないとも想定される。池は汚水の流入などで、戦後頃から徐々に環境が悪化し管理されなくなる。ビニール・ガラス瓶など現代の遺物は埋め立て直前の池の底から多く出土している。

浜田城築城以前の遺物では、中島の下(池の底)から須恵器が出土している。形の判るものでは、(第7図・15、16、17)が益田市の石見空港予定地内遺跡編年Ⅲ

期(島根県教育委員会1992)・江津市の久本奥窯跡Ⅳ期(島根県教育委員会1995)・浜田市の日御遺跡編年Ⅷ期(島根県教育委員会1985)にあたる。およそ8世紀後半～9世紀前葉のものである。

中世の遺物では、備前焼摺鉢(第7図・25)が乗岡編年中世6期(乗岡2005)・間壁編年Ⅴ期(間壁1990)にあたる。およそ16世紀から16世紀末頃の中世末期のものであろう。

おそらく、江戸時代に庭園が築かれる以前は黒褐色系の粘質土が堆積する湿地帯と考えられる。さらに下の基盤層(標高-1m前後)の灰色細粒砂には貝が多く含まれており、貝は大型のものが目立つ。このような城山と浜田川間の湿地帯という地形を利用し、近世に庭園が造られたと想定される。

花粉・珪藻分析の結果(第4章参照)、庭園にはヨモギ類やススキ類・シダ類などが生育し、モチノキ属やモクセイ科の木(庭木か)があったことが判明した。また、池には当初は汽水が浜田川から流れこんでいたが、後に淡水化している。池の堆積が進行したためか、周囲の環境変化なのかは、現段階では不明である。

これまでの調査で昭和40年代に埋め立てられた浜田城の庭園跡の一端を明らかにできた。また、浜田城が築かれる以前の遺物(須恵器片・中世土師器など)も出土し、浜田市街地の歴史を知る上で重要な調査結果となった。

浜田城に関連する施設の調査は初めてであり、今後とも浜田城を含めた周辺の調査を継続し、保存活用を行っていく必要がある。

#### 本文参考文献

井上寛司2001『中世の港町・浜田』浜田市教育委員会  
市本芳三1995『瓦』中世土師器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真福社  
江戸遺跡研究会[編]2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房  
川原和人1970『石西の須恵器』  
関西近世考古学研究会2003『関西近世考古学研究』X I  
九州近世陶磁学会2002『九州陶磁の編年』  
山藤忠1990『石州瓦の資料』『郷土石見』No.25石見郷土研究懇話会  
島根県教育委員会1985『日御遺跡』  
島根県教育委員会1992『大瀬遺跡』

『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』  
島根県教育委員会1995『久本奥窯跡』  
『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1』  
島根県教育委員会1997『115 浜田城跡』  
『島根県中近世城館分布調査報告書(第1集)石見の城館跡』  
乗岡実2005『備前焼の編年と復元』島根県埋蔵文化財調査センター  
専門研修資料  
浜田市1953『浜田の窯業』浜田市商工水産課  
浜田市1973『浜田市誌』上巻  
浜田市教育委員会1992『生湯九右衛門』  
『ふるさとを築いた人々ー浜田藩道懐の碑人物伝ー』  
浜田市教育委員会1993『浜田城跡発掘調査概報』  
『亀山』第20号 浜田市文化財愛護会  
浜田市教育委員会2002『浜田城跡』『浜田の文化財』  
浜田市教育委員会2005『浜田城』パンフレット  
原裕司2001『浜田城調査についてー中間報告としてー』  
『シンポジウム 浜田城を語る』浜田市文化財愛護会・山陰中央新報社  
平田正典1979『石見租陶史考』石見地方史研究会  
藤田亨2001『浜田城址公園について』  
『文化財愛護会 平成13年4月例会 発表資料』  
間壁忠彦1990『備前焼』考古学ライブラリー-60ニュー・サイエンス社  
  
**浜田城関係文献一覧**  
濱田会1892『濱田城地目録』『濱田会誌 第三號』(1892)・『濱田会誌 第三號』  
藤井宗雄1899『濱田鑑』安達共栄堂  
大島幾太郎1935『濱田町史』一誠社  
田村祐一1973『城 石見浜田城』関西城郭研究会  
藤岡大徳他編1980『日本城郭体系 第14巻 鳥取・島根・山口』新人物往來社  
内藤正中編1983『山陰の城下町』山陰中央新報社  
矢守一彦1988『城下町のかたち』筑摩書房  
谷口昭1992『転封考 資料編』『名城法學 第四一巻 第三号』名城大学法学会  
三浦正幸1992『浜田城』『復元体系 日本の城 6 中国』ぎょうせい  
岩崎健1998『浜田城』『Nice To Meet You VOL.153』ladiesますだ  
三浦正幸1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂  
浜田市教育委員会1999『松平副守家成立と浜田』浜田市世界こども美術館  
中井均2004『浜田城』『歴史群像シリーズ よみがえる日本の城 6』学習研究社  
白峰旬2006『天保7年の石見国浜田城引き渡しについて』別府大学大学院紀要 第8号 別府大学大学院文学研究科



調査前



T 1



T 1 杭列



T 2



T 3



T 3 土層



T 3 杭列



T 4



T 4 杭列



T 4 岸側



T 4 西側



T 5



T 6



T 7



T 7 石垣①



T 7 石垣②



T7 石垣③



T7 盛土



T8



T9



T9 杭列・石敷



T9 杭列検出状況



T9 杭列石除去後



T9 土層





作業状況

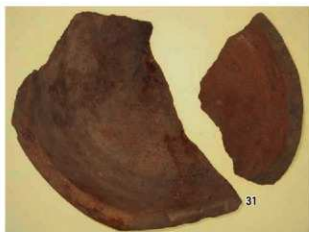


掘削状況









中之島と御便殿



中之島（川側より）

## 報告書抄録

ふりがな	はまだじょうあと ていえんあとのちようさ 1							
書名	浜田城跡(庭園跡の調査1)							
副書名	御便殿取得活用に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	榊原 博英							
編集機関	島根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 TEL 0855-22-2612 (代)							
発行年月日	2007年 3月							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
はまだじょうあと (ていえんあと) 浜田城跡 (庭園跡)	しまねけんはまだし とのまち 島根県浜田市 殿町	32202	L27	34° 54° 03"	132° 04° 24"	20010223 ～20010319 20060410 ～20060512	721㎡  50㎡	御便殿取得活 用に伴う本発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
浜田城跡 (庭園跡)	城跡	古代～中世 近世～昭和40年頃		中島(築山) ・石垣・杭列		須恵器・土師器・陶磁器・肥前陶器 ・石見焼・近世瓦・近現代瓦		浜田城の庭園 として、人工 の池と島を造 る。
要約	<p>浜田城山の南西にあった浜田城の庭園跡は、近世から昭和40年頃まで池と島が2つあったが、埋め立てられてグラウンドになっていた。調査の結果、造成土の下で島の端の杭列・池の端の杭列が確認され、ほぼ池と島の形を確認することができた。池は瓢箪型に近い形をし、くびれ部には石垣などにより水門が造られていた。島は湿地帯に土を盛り上げて造られた人工の島(築山)であった。近世末頃の黒瓦や陶磁器類、浜田城築城以前の須恵器や中世の遺物が出土した。</p>							

**浜田城跡(庭園跡の調査1)**  
**御便殿取得活用に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書**

発行 島根県浜田市教育委員会 2007年3月

島根県浜田市殿町1番地

印刷 柏村印刷株式会社